《書評》

山田仁史、永山ゆかり、藤原潤子編『水・雪・氷のフォークロア―北の人々の伝承世界』

勉誠出版、2014 年、345 ページ

直野　洋子*

Book Review: YAMADA Hitoshi, NAGAYAMA Yukari, FUJIWARA Junko, ed, Folklore of Water, Snow and Ice: Traditional Narrative Stories of Northern Peoples, Tokyo: Benseisha, 2014

NAONO Yoko

―

編者の 1 人、藤原潤子氏の「あとがき」によれば、本書は、総合地球環境学研究所のシベリアプロジェクト（2008～2014 年）の一環として出版されたものであるという。このプロジェクトの正式名称は「温暖化するシベリアの自然と人――水環境をはじめとする陸域生態系変化への社会の適応」であり、地球温暖化の影響が最も顕著に現われると予測される極北地域を研究対象としている。洪水の増加や大規模化、凍土融解による地面崩壊などの現象を、主に自然科学的な手法で解明し、文化人類学的な調査によって現地の人々の対応を明らかにし、適応策を探っていくという文理融合的なアプローチを採用していることが、このプロジェクトの特徴である。その研究の過程で、そもそも「人びとがこうした現象や水環境そのものを彼らの世界観を通してどのように見ているのかを知ることも重要ではないか」という観点から、本書の企画が誕生したということである。

極北における水環境といえば、当然に雪や氷の形態が多くなり、たとえば東シベリアのロシア連邦サハ共和国はほぼ全土が永久凍土に覆われているが、10 月から 5 月までは地表も雪と氷の世界となる。一般に水・雪・氷という H_2O の 3 形態にはクリスタルで清純なイメージがあるが、実際にこれに身近に接し、時にはその猛威に苦しめられてきた、様々な民族、生業、伝統文化の北の人々は、それをどのように受け止め、語ってきたのであろうか。編者の山田仁史氏も指摘す

*国際基督教大学ほか非常勤講師

るように、このような視点から編集されたフォークロアの概説・資料集は世界でも初めてと思われ、注目に値する。

二

本書は依拠する資料の性格によって 2 部に分かれている。第 1 部「北のことばと語りの世界」は、主に言語学を専門とする執筆者たちがフィールドワーク等で集めた北方先住民の資料を紹介している。アイヌ民族を除けば、これだけ多くの北方先住民のフォークロアが、原語から直接訳出されるのは日本で初めてのことであり、執筆者自身が採録し、初めて文字化した資料も多くあって貴重である。一方、第 2 部「北の神話とフォークロア」は文献資料からの翻訳・紹介となり、早くから文字を有した印欧語族と、第 1 部に収められなかった無文字民族のフォークロアが取り上げられている。章ごとに、各民族の習俗、祭、伝統食等を紹介するコラムが設けられており、その多彩な生活の実相に触れることができる。

第 1 部の章立てと執筆者は次の通りである（地名は評者が補足）。

第 1 章　アイヌ（北海道）　高橋靖以
第 2 章　ウイルタ（サハリン島）　山田祥子
第 3 章　ニヴフ（サハリン島）　丹菊逸治
第 4 章　イテリメン（カムチャッカ半島）　小野智香子
第 5 章　アリュートル（カムチャッカ半島）　永山ゆかり
第 6 章　ユカギール（サハ共和国）　長崎郁
第 7 章　サハ－－民話と伝承（サハ共和国）　江畑冬生
第 8 章　サハ－－歌謡と口琴（サハ共和国）　荏原小百合

各章の構成は、おおむね次の通りであるが、第 8 章は歌謡や口琴の解説、水・雪・氷に関わる歌詞や主題、演奏技法の紹介が中心である。

1　概説
　1.1　各民族の基本情報
　1.2　フォークロアの概要
　1.3　伝統的世界観
　1.4　水・雪・氷に関する語彙
2　民話・伝承
　2.1　水に関する伝承
　2.2　氷に関する伝承
　2.3　雪に関する伝承
3　語り手紹介
コラム

永山ゆかり氏による第 1 部全体の概説では、北方先住民の共通性として、「水・雪・氷に関する語彙を豊富に持ち、生活面での関心の高さがうかがえるいっぽうで、フォークロアにおける描写がきわめて少ない」ということが挙げられている。つまり、「雪女」「雪の女王」のような人格化が行われることはほとんどなく、畏怖の対象となることもない。雪は雲や風といった自然現象と同じような、いわば生活のバックボーンとして描かれているようである。したがってはからずも、「本書のテーマに合致するフォークロア資料を集めるのは困難な作業であった」。もっとも、水、特に海や川、湖を舞台とする話は比較的多く、水の主や海の主もよく登場するようである。永山氏は、そうした主ももっぱら獲物をもたらす存在として捉えられており、「水を司る日本の水神のような性格づけはない」として、両者はそれぞれ狩猟・漁労民族、農耕民族に特有のものであり、生業の違いに起因すると説明している。

また永山氏は、「神話というジャンルがない」ということも、この地域に共通の特徴としている。そして「民話や伝承は過去に実際に起こったことと架空のことに大きく分けられており、実際に起こったことは最近の出来事とそうでないものに分けられる」とまとめている。しかし、各章で紹介されている民族独自の分類法はそれぞれにずいぶん違いがあるように見受けられ、ジャンル分類のむずかしさを感じる。「神話は特定の社会において、人々によって真実と受けとめられている話であり、神話の中に語られる出来事によって、現実のさまざまな事象の存在の根拠が示され、基礎づけられる」［文化人類学事典 1994 : 392］という神話の定義からすれば、たとえば第 2 部で紹介されているチュクチ（チュコト半島）の話「太古の雪嵐」（人々が邪悪になったので太陽に住む善霊が罰として雪嵐を起こし、大地を裂き、分散した人間たちから様々な民族が生まれた）を神話でないと言い切ることはむずかしいであろう。シベリア・フォークロア研究の第一人者、齋藤君子氏は、その著書『シベリア　神話の旅』の中で、「物語の内容が単なる作り物とは考えられていないという点から言えば、日本やヨーロッパの昔話に相当する話はシベリアにはほとんど存在しない。カムチャトカ半島やチュコトカ半島に居住する民族の昔話をロシアの口承文芸研究者が『神話的昔話』と呼ぶのはそのためである」［齋藤 2011 : 1］と指摘した上で、「シベリアには神話というジャンルはない。あるのは神話的観念であり、それは口伝えで伝承されてきた物語のすべてに含まれているといっても過言ではない」［齋藤 2011 : 12］と記している。

現在のフィールドワークにおいて、人々が物語を「神話」として受けとめている（いた）かどうかを確認することはもはや不可能かもしれない。人口、話者数ともに 45 万人を数えるサハ民族を別格として、ウイルタは人口 300〜400 人で話者数はわずかに 10 名足らず、イテリメンも人口 3193 人で話者数はやはり 10 名程度、人口 2000 人のアリュートルも話者数 100 人程度と、少数先住民の文化、言語はまさに存亡の危機にある。そうした中でフィールドワークに赴き、原語からのフォークロア収集を行った執筆者たちの調査研究活動に敬意を覚える。一方で別格のサハ民族については、日本の歌謡曲に相当するとも言えそうな「サハ歌謡」の紹介が、民族の隆盛を伝えていて興味深い。

三

第2部では、山田仁史氏が全体の概説と第10章「北方の諸民族」を、藤原潤子氏が第9章「ロシア」を担当している。ロシア民族のフォークロア資料は本書で最も手厚く紹介されており、アファナーシエフ・ロシア昔話集から「雪娘」、「冬爺さん」、「海の王」、「死の水と命の水」の登場する昔話が、また、水の主ヴォジャノイ、水辺に棲む女の精霊ルサルカなどの登場するいわゆる妖怪譚をはじめ、伝説、巡礼霊歌、呪文、ことわざの類いに至るまでの多様なジャンルの資料が読める。これらの資料は主に19世紀から20世紀初頭にかけて採集されたもので、ロシア民族が培った水をめぐる豊かな、アンビヴァレントなイメージを伝えている。藤原氏が調査研究している、現代ロシアにおける呪術や異教のリバイバルの動きも触れられていて、関心を引く。

第10章に紹介されているのは、やはり19世紀から20世紀初頭にかけての資料から、チュクチ（チュコト半島）、コリャーク（カムチャッカ半島）、ハンティ（西シベリア・トボリスク）、サーミ（スカンジナビア半島北部）、ドイツ、イヌイット（グリーンランド、カナダ・ハドソン湾）、オタワ（カナダ・ヒューロン湖）、オジブワ（カナダ・グレートスレーヴ湖）の物語、フィン（フィンランド）の呪文、前5世紀のヘロドトス『歴史』からスキタイ（黒海北岸）の「羽毛としての雪」の観念、中世にまとめられた資料からアイルランド、アイスランドの北欧神話、聖者伝で、実に多様である。北方先住民の話は、まだフォークロアが生きていた時代に採集された資料を広く参照しているせいか、総じて第1部の伝承より長くダイナミックである。世界を滅ぼすような大洪水、雪嵐などの災害も描かれていて、注目される。

山田氏は概説で、このような多様な資料に通底するものとして、北半球高緯度地方に共通するシャーマニズムの文化があることを指摘している。それは無文字社会にのみ見られるわけではなく、印欧語族にも様々なその痕跡が残されており、たとえば北欧神話の主神オーディンが苦行の末ルーネ文字などの秘奥の知識を得る過程は、シャーマンの修行に通ずるものだとしている。一方で、北方先住民では雪や極寒を人格化する発想が一般的でなかったのに対し、ヨーロッパはそうした事例が多く、擬人化された夏と冬が闘って最終的に前者が勝利するという儀式が各地で見られると述べている。

四

このように本書を通して、水・雪・氷という恵み、あるいは試練を、様々な民族、言語、歴史、自然環境に規定された北の民がどのように受け止め、物語などの言語芸術に昇華してきたかを概観し、鑑賞することができる。浮かび上がった共通点や相違点をさらに掘り下げることも興味深い課題であろう。そして本書の母体となったプロジェクトに立ち返れば、地球温暖化による環境の激変で、この北の民の実生活ばかりでなく、その世界観、経験知も大きく揺るがされることが懸念されるのである。なにしろ、氷河と永久氷は地球表層の水の1.74%、永久凍土は0.02%

を占めているとされ、わずかではあるが、2 番目、4 番目に多い［沖 2012 : 30］。温暖化で氷河や凍土が溶け出した際の影響ははかりしれない。激しい降雨の頻度が増加し、洪水リスクが高まるとも言われている。

あとがきには、こうした関心に応えるものとして次なる関連書籍の出版が予告されている。タイトルは『温暖化するシベリア――変化する水環境と社会』で、藤原潤子氏が再び編著者の 1 人となっている。シベリアの気候、植生、動物、近年の水害とそれに対する適応策が記述される他、北方諸民族の文化における「水」について、より詳細な解説もなされるとのことである。シベリアの水環境の変化は、人々の水をめぐる観念、意識をどのように変容させていくのだろうか。昨年、大雪による交通途絶や大雨による土砂災害に立て続けに見舞われた日本に住む私たちにとっても、おおいに注目すべき切実なテーマであると言えるだろう。

引用文献

沖大幹
2012『水危機　ほんとうの話』、新潮選書
齋藤君子
2011『シベリア　神話の旅』、三弥井書店
『［縮刷版］文化人類学事典』
1994 弘文堂